

黄腸題湊および黄腸石の墨書

安藤喜紀

はじめに

漢代の書道史を形成するにあたり、大きく刻石書法と簡牘書法の二方向から論じられることが多く、その関連性については、いまだに多くの議論の余地を残している。後漢の諸侯王墓の一種である黄腸石墓は、かねてより墨書と刻文の両方があることが指摘されていたが、墨書および刻文の多くの図版は確認できずにいた。しかし、ここ数年の研究の進展、書籍の出版により、任城漢墓黄腸石、北莊漢墓黄腸石の刻文をほぼ網羅するようになった。しかし、それらの資料はそれぞれの漢墓ごとで資料がまとまるのみで、横断的に見ることができるようにはなっていない。そこで、改めて現在確認できている黄腸題湊および黄腸石墓の文字資料の内容について整理を行い、今後の黄腸題湊および黄腸石の文字研究における基盤としたい。

本稿では、黄腸題湊および黄腸石上の墨書について、現在管見を得た限りの資料をまとめ、簡潔な考察を付す。

一、現在確認される黄腸題湊および黄腸石墓

まず、各地で確認されている黄腸題湊および黄腸石の全体像を把握するために、現在推定されている各黄腸題湊および黄腸石墓の墓葬年代、墓主をまとめ、それを推定される墓葬年代順に並べ替えたものを表にした。なお、墓葬年代については、その先行研究によって推定される年号のあるものはそれに従い、ないものは、推定墓主の没年を基準にしたほか、複数人推定墓主のあるものは、発掘報告並びに先行研究の記述と合わせて、およその墓葬年代を算出している。

この表を見る限りにおいて、漢初には異姓諸侯王の張耳、呉氏の墓葬にも見える。長沙王が呉氏から同姓諸侯王に変わった頃まで長沙国では黄腸題湊の墓葬が続く。その後は地域的に散在するものの、近い年代にまとまって作られることが多い様子がうかがえる。

表としてまとめたものは文字資料と墓主の関連から前漢以降に限定しているが、前漢以前にも、秦の大公一号墓が題湊を作ったとする記述がある。(二九) そもそも「題湊」の語は『呂氏春秋』「孟冬紀」節喪に「今無此之危、無此之醜、其為利甚厚、乘車食肉、澤及子孫、雖聖人猶不能禁、而況於亂。國彌大、家彌富、葬彌厚。含珠鱗施、夫玩好貨寶、鍾鼎壺盞、輿馬衣被戈劍、不可勝其數。諸養生之具、無不從者。題湊之室、棺槨數襲、積石積炭、以環其外。姦人聞之、傳以相告。上雖以嚴威重罪禁之、猶不可止。」と見えるのが最も古い使用例であり、出土文物においても戦国中山王墓の兆域图中²⁾にも見える。そのため、「題湊」の概念は戦国時代晩期にはあったと考えられる。『呂氏春秋』の記述を見る限り、題湊は葬を厚くして墓室を作る際に用いられた材の積み方であって、回廊を形成する材に使用するようになったのは墓室をめぐる回廊を形成する壁材に使用するようになったのは漢に入ってからと考えられ、題湊の役割の変遷については、一考を要する。

この題湊の役割は、盗掘を防ぐ目的が大きかったと思われるが、戦国中山王墓の兆域図中に見える題湊は王や王后の墓室ではなく、それより下位である夫人の墓室にのみ使用されたと思われる、盗掘を防ぐ目的以外にも、礼の観点から何かしらの意味があった可能性も否定できない。

二、黄腸題湊上の墨書

黄腸題湊の墨書については『定陶漢墓黄腸題湊調査、保存与研究』に4例見える。²¹²例は墨書画像で2例は赤外線写真による解析によって判読可能な状態になった図版である。また有紀年ものが2例、無紀年で大きさや重さなどが記されたものが2例である。定陶の黄腸題湊の大きさはその多くが長さ1.15m、厚さ0.6m、幅0.75mであり、それに類するものであろう。一字の大きさは不明であるが、図版の書が幅0.75mの面ならば、比率から行幅は10cm未満である。

その文内容は、漆器の針刻、骨簽などに類し、役職名および人名、数量（題湊の大きさ）、紀年である。その詳細な内容については別稿に改めるが、その書の様相は、尹湾漢墓の名謁の書風に近い、均整な波法をもった書である²²。三行の構成を持つものは布字も尹湾漢墓の名謁に近しく、行頭が揃いながら、左下に人名と思われる内容が書される。以下図版4例の翻刻を示す。

● 図1（図5～9は拡大）

建始四年癸丑護臨匠充斲奴小王誼作掾譚奮夫宣佐通護ニ敞長樂省匠由補節中 奴彊書

令政作丞晏臨榑

● 図2（図10～12は拡大）

河平二年四月乙亥護臨匠聖斲奴任賞作掾憲奮夫佐宣護長寿畦游省匠賀補節厚卅二寸五分重一斤 奴良書

令政作丞晏臨榑

● 図3（図13は拡大）

厚卅二寸三分重一斤 補空一所廣寸長三分

● 図4（図14は拡大）

時代	墓名	形式	墓葬年代	墓主
前漢	河北石家荘市北郊前漢墓 ¹	題湊	前201頃?	趙王張耳
前漢	長沙咸家湖前漢曹纘墓 ²	題湊	前201頃～前157頃?	曹纘（呉臣、呉回よりやや下る）
前漢	湖南長沙望城坡西漢漁陽墓 ³	題湊	前180～前157頃?	長沙王后（呉氏王后）
前漢	湖南長沙象鼻嘴一号漢墓 ⁴	題湊	前157～前127頃?	長沙靖王呉著或長沙王劉発
前漢	江蘇盱眙大雲山漢墓 ⁵	題湊	前128頃?	江都易王劉非
前漢	広州東山亀岡南越王漢墓 ⁶	題湊?	前118頃	南越王趙胡(?)
前漢	安徽六安双墩一号漢墓 ⁷	題湊	前84頃	六安共王劉慶
前漢	北京老山漢墓 ⁸	題湊	前80頃～前3頃?	燕王劉旦妾或広陽王劉舜后或劉瓊后
前漢	高郵天山一号漢墓 ⁹	題湊	前54頃?	広陵王劉胥
前漢	河北定県40号漢墓 ¹⁰	題湊	前54頃?	中山懷王劉修
前漢	望城風篷嶺漢墓 ¹¹	題湊	前42～前49	長沙王后（劉旦或劉宗或劉魯人后）
前漢	北京大葆台漢墓 ¹²	題湊	前44頃?	広陽頃王劉建(?)
前漢	山東定陶漢墓 ¹³	題湊	前29～前27頃	定陶恭王劉康
後漢	河北定県北莊漢墓 ¹⁴	石	84～88	中山簡王劉焉
後漢	山東任城王漢墓 ¹⁵	石	89～98	任城考王劉尚
後漢	徐州土山一号漢墓 ¹⁶	石	未詳	彭城王
後漢	洛陽邙山 ¹⁷	石	135～180頃?	
後漢	洛陽孟津送莊漢墓 ¹⁸	石	152～154頃?	

上

補節三所深八分至一寸

この積読については『定陶漢墓黄腸題湊調査、保存与研究』を参照し^{2,3}、一部稿者が補った。

ここの左下部分に「奴〇書」の語が見え、これが書丹者の名を表すと考えられる。文内容の解釈とともに、書丹者の身分とその書に関する考察は漢代書道史上重要な意味を持つと考えられる。文構造は骨簽や漆器などの構造とほぼ同じであるため、黄腸題湊の製造工程上の管理制度もここから読み取れる可能性があり、ほとんど解明されていない漢代諸侯王国の社会制度の一端を垣間見ることができよう。

近年では骨簽資料も充実してきたことから、漢代工官研究も盛んにおこなわれるようになっており、人名研究においても重要な役割を果たすこととなる。惜しむらくは多くの黄腸題湊の墨書は、あつたとしても、河平二年題湊のように、赤外線撮影しなければ判読できなくなっている可能性が高く、膨大な資料の整理に多大な時間を要するであろうことである。今回の事例を皮切りに、ほかの黄腸題湊墓における黄腸題湊研究が加速することを切に望むばかりである。



図 2

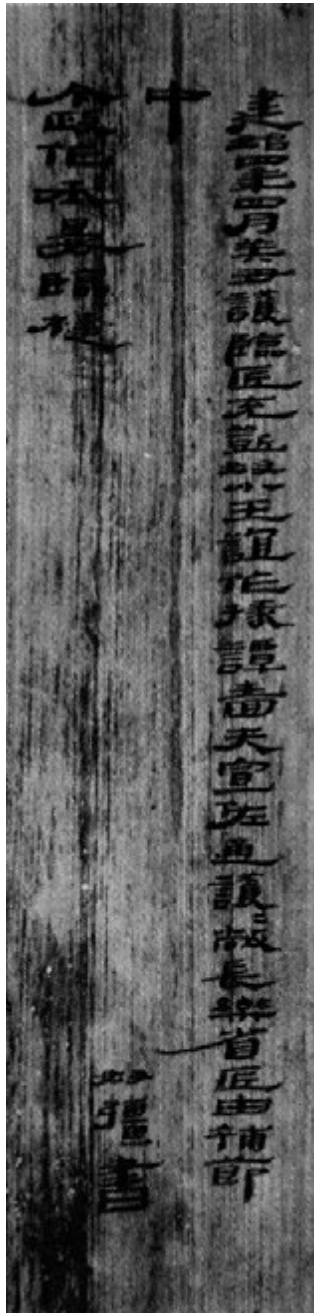


図 1



図 4

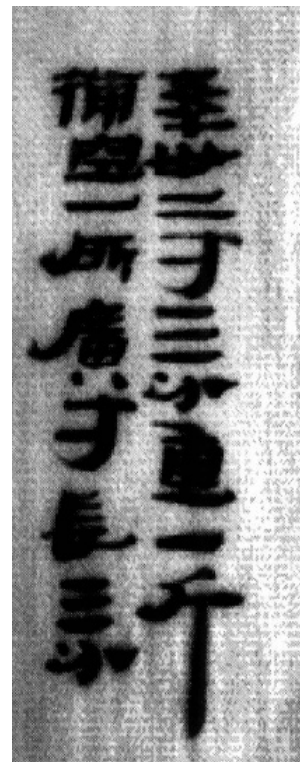


図 3

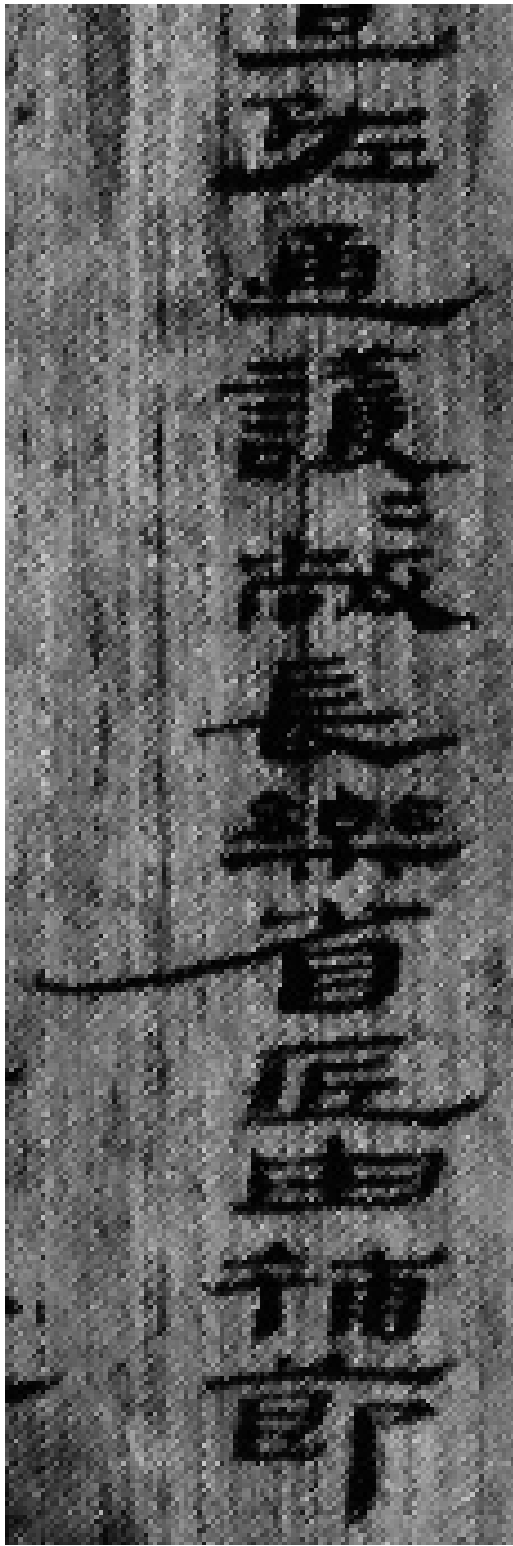


图 7
(图 1 部分扩大)



图 6
(图 1 部分扩大)



图 5
(图 1 部分扩大)



図 9
(図 1 部分拡大)

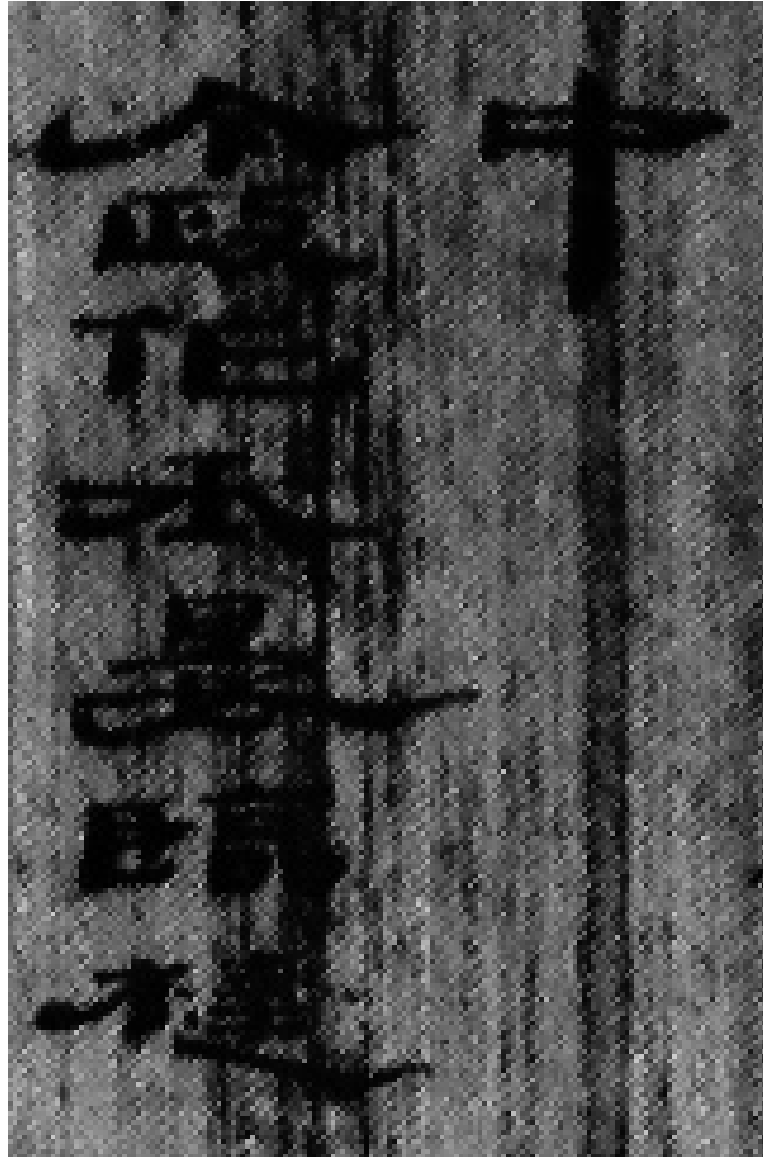


図 8
(図 1 部分拡大)

図 1～9 は『定陶漢墓黄腸題湊調査、保存与研究』から引用

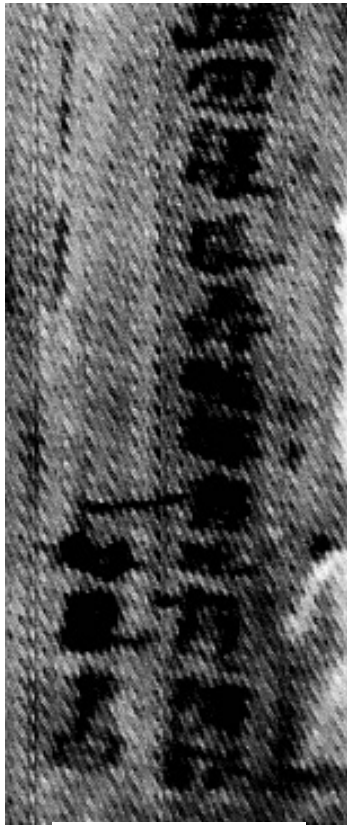


图 12

(图 2 部分扩大)



图 11

(图 2 部分扩大)



图 10

(图 2 部分扩大)



图 14

(图 4 部分扩大)

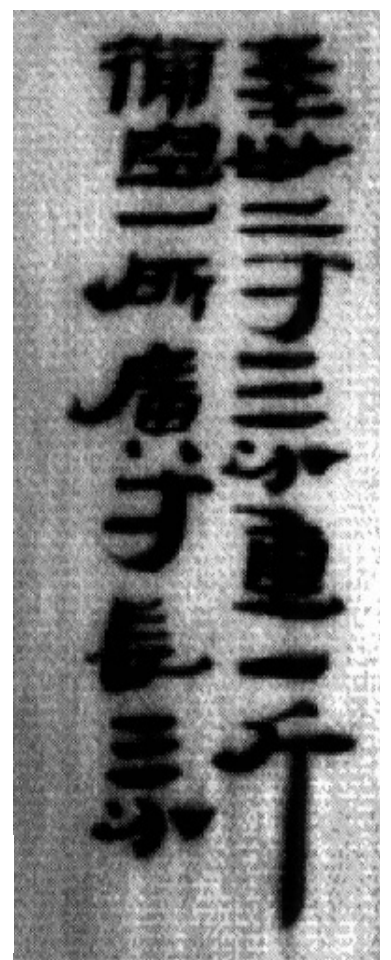


图 13

(图 3 部分扩大)

三、黃腸石上の墨書

黃腸石上に見える墨書の例は北莊漢墓において発掘報告中に記載があったものの²⁴、それ以降、図版で見ることができず、その様相については不明なままであったが、『定州子北莊漢墓黃腸石題銘』に三例収載されたことで確認できるようになった(図14～17)。これまでの情報と同じく、「上曲陽石」の一部の黃腸石のみではあるが、比較が可能となり、『定州子北莊漢墓黃腸石題銘』中でもその墨書に関しては随所に言及されている。『定州北莊漢墓黃腸石題銘』中での墨書とその生産工程に関する記述を以下に抜粋する。

當黃腸石經過制石工匠精心契鑿斧利、六面加工平整、達到質量要求之後、最後一道工序便是鐫刻文字、即題銘。一般說來、加工過程中留下的或交叉的鑿道痕、會與所鐫刻文字筆面產生干擾、文字顯得雜亂無章、甚至影響到題銘清晰度而難以弁識、為方便起見、工匠們利用斧鑿鑿刀等利器、直接在石上選擇較平整部位沖刻文字、依次而就、一般不必先書後刻。鐫刻的順序是先將整行文字的橫筆刻就、而後沖刻點、豎、扌、捺等筆畫。如此、既便于操作、又省工省力。如“望都石文陽車和”、系魯國文陽縣工匠車和所刻、左行因錯刻保留下諸多橫畫跡、右行為二次刻成功作品。這種情況在北平、望都石材場地題銘中表現的較清晰、並為我們分析研究工匠刻銘順序、提供了可信証據。

先書後刻的情況似乎在上曲陽石中可以見到、對保存的墨書和一部分墨書一部分鐫刻的題銘分析表明、在這裡大部分題銘可能採取了先書後刻工序。²⁵

拋馬孟龍研究²⁶、黃腸石題湊墓的建造最早流行今山東、河南兩省交界地區、也就是東平、梁國、魯國、山陽郡分布區域。通過此類墓葬建造、這裡的工匠們積累了豐富的經驗、熟練地掌握了黃腸石制作技術。因此、

當定州北莊子漢墓建造時、從這些國(郡)調集大批經驗豐富的工匠、參與修建墓葬建築工程。另層含義是、在中山國區域內、首次建造這類黃腸石題湊宏大墓葬、當地工匠自然缺乏經驗和制石技術。為保證工程進度和質量、管理者將熟練工安排到各個制作場地、對當地工匠有很現實的樣板交流和指導作用。這一得力措施、對於墓葬建造及黃腸石制作、應該起到了非常重要的作用。例如、作為石材產地和黃腸石加工場地的上曲陽、沒有梁國、魯國工匠參加、而山陽郡和東平國的工匠也甚少、當地也只見苦陘、毋極縣工匠參加。因此、這裡不僅制石數量很少、而且題名非常不規範、文字粗糙、布局欠佳、在當地工匠中表現的極為突出。可能是因為缺少楷模、題刻功夫不熟練、這裡還出現了墨書題記、有些黃腸石上全部為墨書、有些黃腸石的題銘是墨書與鐫刻相互結合。這些現象、似乎表明先書後刻工藝在這裡較為流行。²⁷

以上石工人數並非絕對準確數字、因為、在黃腸石題銘中、當存在“同名異工”和“異名同工”現象。一些題銘顯示、刻有同一石工姓名黃腸石、可能出自不同石工之手、而同一石工可以為自己、也可以為其他石工(如不識字者)鐫刻。²⁸

在北莊子漢墓黃腸石上、可見有墨書題記、但數量較少、所有的墨書題記、都无一例外見于上曲陽石材加工場地生產的黃腸石上、說明當時只有這裡流行墨書題記、而北平和望都則不見使用。(中略)

另一種型式全部為墨書題記、在1959年發掘照片中存有三例(中略)石上不見刻銘、只存墨書。也有與墨書文字內容近似的刻銘、(中略)這些情況說明、相同內容刻銘、既可以墨書、也可以鐫刻。上曲陽石材產地黃腸石的刻銘和墨書題記、大多刻寫于黃腸石側面、五六個字仍須兩行布局。²⁹

以上をまとめると、氏の主張は以下の三点となる。

①黄腸石の製造において、工人は各地の製石場に派遣され、刻まで行われてから石材を運んだこと

②上曲陽石のみ墨書が見えるのは、それが上曲陽の製石場で慣例的におこなわれていたこと

③上曲陽の工人が製石および刻の作業に不慣れなために、その内容を管理者が指導のために書丹した可能性があること

しかし、墨書の字姿と図18、21の同文の刻字を比較すると、同文のものと非常に近い字形を取る様子がうかがえ、先述の黄腸題湊上の墨書のような整った形では書丹されていない。工人には墨書の字をそのまま刻すだけの技術はあったように思われ、識字に難があった可能性は否定できないものの、刻文を刻す技術面においても不慣れであったと考えてよいのかは疑問が残る。また、一部墨書しか残らず、刻されずに運搬されたことについても疑問が残るため、製造工程についてはより深い議論の余地があるように思われる。この点については、北莊漢墓や任城漢墓の黄腸石のすべてに刻字があるわけではない点も含めて慎重に議論を進める必要がある。

また北莊漢墓の黄腸石には、発掘報告時の様相と変わってしまった部分や毀損、逸失したものもあり、墨書についても、「上曲陽」字のみを書丹し、「新市石」などの別文を刻したものがあつた記録があるが³⁰、『定州北莊漢墓黄腸石題銘』の中でそれらの墨書は確認できない。出土から半世紀ほどの間に刻字に手が入ってしまったこともあり、資料的な問題点があることも考慮したうえで、慎重な扱いが求められる。

おわりに

本稿では、近年出版された資料から黄腸題湊および黄腸石上の墨書の資料をまとめ、今後の研究の基盤とする基礎的な問題点の提示と、簡単な考察を

付した。黄腸題湊と黄腸石の製造工程の違いや、記録内容の違いなども踏まえ、その書体、書風となった背景にまで踏み込み、漢代における刻と書との関連を紐解くための一助としたい。

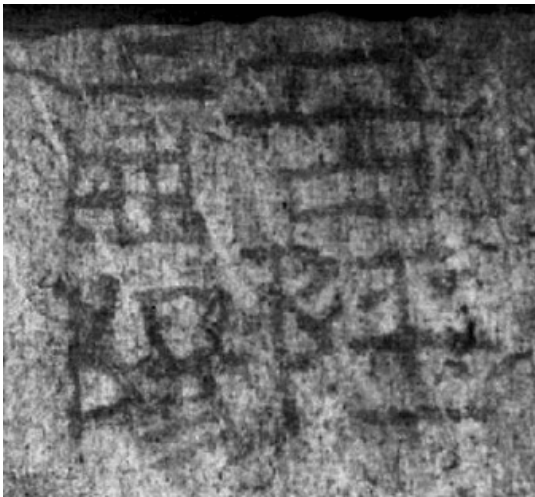


図 16



図 15



図 17



図 21



図 20



図 18



図 19



図 22

図 15～22 は『定州北莊子漢墓黃腸石題銘』から引用

- 1 「河北石家庄市北郊西漢墓發掘報告」(『考古』一九八〇第一期) 参照。
 「長沙咸家湖西漢曹燾墓」(『文物』一九七九第三期) 参照。
 2 「湖南長沙望城坡西漢漁陽墓發掘簡報」(『文物』二〇一〇第四期) 参照。
 3 「湖南長沙象鼻嘴一号西漢墓」(『考古學報』一九八一第一期) 参照。
 4 「江蘇盱眙大雲山漢墓」(『考古』二〇一二第七期) 参照。墓主については金山・王棟「江蘇盱眙大雲山漢墓再考及墓主身份推定」(『文物鑑定與鑑賞』二〇二一・六 第十一期) に基づいた。
 5 鄒安『草隸存』卷下所収の「南越王家漢初刻字跋」を参照。墓主については岡崎敬「漢代明器泥象と生活様式」(『史林』四十二号 一九五九) に「考古學雜誌」の創刊号には、(中略)一九一六年東山廟前龜岡で発見されたいはゆる南越王胡の墓の木刻文字の考証などをのせている。」とあり、その注に「譚鏞氏(広東の文廟)は元狩五年(前一八八年)以後歿したと推定される南越王胡か嬰齊のうち、後者は孫呉の黄武五年にあばかれたというから文王胡の墓と想定した」との記述に拠った。ただし、現在では一九八三年に象岡で発掘された南越王墓の墓主が趙胡である説が有力視されており、墓主については再考の余地がある。
 6 『西漢“黄腸題湊”葬制的考古発現与研究』(北京市大葆台西漢墓博物館編 北京燕山出版社二〇一三) 所収 王景輝、楊立新「安徽六安双墩一号漢墓」及び、同王景輝「安徽六安双墩一号漢墓的發現与研究」参照。墓主については馬育良「六安双墩一号漢墓墓主考」(『合肥師範學院學報』二〇〇八第四期) に基づいた。
 7 『西漢“黄腸題湊”葬制的考古発現与研究』(北京市大葆台西漢墓博物館編 北京燕山出版社二〇一三) 所収 王鑫「北京老山漢墓」参照。墓主については秋山進午「北京老山漢墓參觀記」(『大手前大学人文科学論集』第二卷 二〇〇一) に基づく。広陽王劉舜の後か劉璜の後が墓主であれば、大葆台漢墓よりも年代は下るが、本文中の表では最も早い年代に合わせた。
 8 『西漢“黄腸題湊”葬制的考古発現与研究』(北京市大葆台西漢墓博物館編 北京

燕山出版社二〇一三) 所収 梁白泉「高郵天山一号漢墓發掘側記」(原載は『文博通訊』一九八〇・八 第三十二期) 参照。墓主については王冰「高郵天山漢墓墓主考弁」(『文博』一九九九第二期) に基づいた。

1 0 「河北定県40号漢墓發掘簡報」(『文物』一九八一第八期) 参照。

1 1 「湖南望城風箏嶺漢墓發掘簡報」(『文物』二〇〇七第十二期) 参照。墓主については何旭紅「南望城風箏嶺漢墓年代及墓主考」(『文物』二〇〇七第十二期) に基づいた。

1 2 「大葆台西漢木椁墓發掘簡報」(『文物』一九七七第六期) 参照。墓主については

王燦熾「大葆台漢墓墓主考」(『文物』一九八六第二期) に基づいた。

1 3 「山東定陶県靈聖湖漢墓」(『考古』二〇一二第七期) 参照。墓主については盤霄遠「山東定陶靈聖湖漢墓墓主身份研究」に基づき、本文に示した墨書の積文に見える紀年も踏まえた。

1 4 「定県北莊漢墓發掘報告」(『考古學報』一九六四第二期) 参照。墓主については、飯山三九郎「河北定県北莊漢墓刻石の書丹者」(『書學書道史研究』一九九四) に基づく。

1 5 胡広躍編著『任城王漢墓出土黄腸石題刻全集』(三秦出版社二〇一七) 参照。

1 6 「徐州土山漢墓清理簡報」(『文博通訊』南京博物院編一九七七・九) 参照。

1 7 趙振華著『洛陽東漢黄腸石題名研究』(国家図書館出版社二〇〇八) 参照。ここに所収の黄腸石は孟津送莊漢墓出土のもの以外、すべて漢墓の發掘調査によって出土したのではないため、厳密には墓葬制度との関連付けは難しい。しかし、黄腸石の有紀年刻文の資料として非常に重要な位置を占めるものであるため、ひとまとめにして表中に採用した。年代はここに見える紀年の範囲である。

1 8 「孟津送莊漢黄腸石墓」(『河南文博通訊』一九七八第四期) 参照。

1 9 秋山進午「北京老山漢墓參觀記」(『大手前大学人文科学論集』第二卷 二〇〇一) に言及されているもので、この注に「墓室が黄腸題湊であったことが王学理『秦始皇陵研究』上海人民出版社、一九九四年、74頁に記載されている」と見える。

『秦始皇陵研究』についてはまだ稿者は確認できていない。また、馬振智「試談秦公一号大墓的椁制」(『考古与文物』二〇〇二第五期)にも題湊であることが言及されている。

2 0 「河北省平山県戦国时期中山国墓葬発掘簡報」(『文物』一九七九第一期)

2 1 成倩、王江峰『定陶漢墓黃腸題湊調査、保存与研究』(科学出版社二〇一八・七)に附された図版57、67が墨書にかかわる。

2 2 尹湾漢墓の名詞の書風については、横田恭三「尹湾漢墓簡牘の隸書書法について」

(『国際書学研究』第4回国際書学研究大会記念論文集)書学書道史学会編二〇〇〇)に詳しい。

2 3 成倩、王江峰『定陶漢墓黃腸題湊調査、保存与研究』(科学出版社二〇一八・七)

一九五頁及び二〇三頁参照。ここに見える釈文は「建始四年癸丑……長楽省匠由……」、「河平二年四月己亥護臨匠……長寿畦游省匠賀補節……奴良書……令政作丞晏臨榿」、「……補空一所廣寸長三分……」の三種である。

2 4 「定県北莊漢墓発掘報告」(『考古学報』一九六四第二期)一五五〜一五九頁にある「北莊漢墓題名石塊登記表」中の114石及び138石の「上曲陽」字がそれぞれ墨書であることが明記されている。

2 5 定州市文化広電和旅游局編著『定州北莊子漢墓黃腸石題銘』(文物出版社二〇二〇・一一)五一頁。

2 6 馬孟龍「定県北莊漢墓墓石題銘相関問題研究」(『考古』二〇一二第十期)に、

「就目前的考古発掘来看,以石筑墓垣為特点的漢代諸侯王墓葬最早出現在今山東、河南兩省交界地区,如山東巨野紅土山漢墓、河南永城僖山一号墓、二号墓和窯山一号墓、二号墓便属于這一墓葬類型。紅土山漢墓墓主被認為是西漢昌邑王劉髆、而僖山、窯山兩墓墓主可確定為西漢晚期的某兩代梁王和王后。趙化成、高崇文兩位先生提到,僖山漢墓“反映了諸侯王墓中一種新葬制開始出現”。北莊漢墓的营造形制与紅土山漢墓、僖山漢墓、窯山漢墓多有近似,而紅土山漢墓、僖山漢墓、窯山漢墓墓石同樣帶有題銘因此兩者間应当存在淵源關係。(中略)以凿刻石块

呈砌墓壁的墓葬形制逐渐由昌邑国、梁国流行于周边的東平、魯等王国。至東漢初期、石筑墓垣的营造技術在梁、山陽、魯、東平等地已經成熟。中山簡王在宮建陵墓時採用了石筑壁垣的墓葬形制、因此從梁国、魯国、東平国、山陽郡引進大量工匠参与王陵的宮建、故北莊漢墓墓葬形制与僖山漢墓、窯山漢墓多有相似之处。」とあるのに拠る。

2 7 注二四参照。五四頁。

2 8 同五九頁。

2 9 同六六頁。

3 0 注二三参照。